

医療安全対策室

平成 22 年度 医療安全包括的公表

公表基準に基づき、平成 22 年度集計結果を公表します。

1. 平成 22 年度 医療安全報告件数

区 分	レベル0	レベル1	レベル2	レベル3 a	レベル3 b	レベル4	レベル5
グループ	グループA					グループB	
報告件数	2, 9 5 3 件					2 件	

・平成 22 年度医療安全報告件数において、グループ A (2953 件) で、レベル0、レベル1が多くを占めた。またレベル3 a、3 b以上の事案全例について医療安全対策委員会及び医療安全調査部会にて検討審議し、再発防止策及び改善を講じた。グループ B の事案は 2 件発生。事案 1 は予定より腹腔鏡手術が長時間かかり、術後しびれと麻痺症状が発覚しリハビリ開始となり、退院後もリハビリを継続となった事例。改善対策として神経麻痺予防は、長時間同一部位の圧迫を防止するための体位の改善と除圧を図るためのマットの改善を行った。事案 2 は療養上に関する事例で、公表に関してご家族の同意が得られず、公表は差し控える。

2. 発見者別年度推移

区 分	2 2 年度	構成比率	2 1 年度	構成比率
報告者本人	1, 4 5 0	4 9. 1 %	1, 3 6 7	5 3. 5 %
同職種者	8 3 5	2 8. 3 %	7 2 1	2 8. 2 %
他職種者	3 4 4	1 1. 6 %	2 4 1	9. 4 %
患者本人	1 3 9	4. 7 %	8 9	3. 5 %
家族・付き添い	1 0 7	3. 6 %	7 6	3. 0 %
他患者	6 7	2. 3 %	5 7	2. 2 %
不明	0	0. 0 %	0	0. 0 %
その他	1 3	0. 4 %	5	0. 2 %
合 計	2, 9 5 5	1 0 0. 0 %	2, 5 5 6	1 0 0. 0 %

・発見者別年度推移において、当院では従来より患者さんと医療者のパートナーシップを築き、患者さん・家族・付き添いの方々にも医療安全への積極的参加を求めています。患者さん・ご家族の立場からも安全情報収集を行っており、その成果として今年度は「患者本人」「家族・付き添い」からの発見報告が前年に比べ大幅に増加した。また他職種間ダブルチェックの励行による発見が昨年度に比べ増加した。これは医療安全に対するチーム医療による部門間の取り組みが一段と浸透してきたと考える。

3. 平成 22 年度 発生件数情報報告

項 目	誤った医療の実施の有無			合計	比率
	実施なし		実施あり		
	影響度 (当該事例の内容が仮に実施された場合)				
	死亡もしくは 重篤な状況に 至ったと考え られる	濃厚な処置・ 治療が必要で あると考えら れる	軽微な処置・治 療が必要もし くは処置・治療 が不要と考え られる		
薬剤関連	0	1	1 2 4	6 4 5	7 7 0 2 6. 0 %
輸血関連	0	0	1 5	5	2 0 0. 7 %
治療・処置関連	0	1	3 8	1 3 0	1 6 9 5. 7 %
医療機器等	0	0	1 7	5 9	7 6 2. 6 %
ドレーン・チューブ 関連	0	2	4 1 5	1 1 2	5 2 9 1 7. 9 %
検査関連	0	0	1 2 3	1 3 0	2 5 3 8. 6 %
療養上の世話	0	6	8 8 6	6 7	9 5 9 3 2. 4 %
その他	0	0	1 7 0	9	1 7 9 6. 1 %
合 計	0	1 0	1, 7 8 8	1, 1 5 7	2, 9 5 5 1 0 0. 0 %

- ・当院は「ヒヤリ・ハット事例収集事業参加登録医療機関」として、財団法人日本医療機能評価機構「医療事故情報収集事業」に参加し、「発生件数情報」「事例情報」について情報提供している。
- ・平成22年度医療安全報告件数は2,955件と昨年度に比べ約400件程度増加し、報告された事案について「項目分類」等は財団法人日本医療機能評価機構「医療事故情報収集事業」に準じた。

4. 発生事例で病院内で改善した再発予防策（抜粋）

区分	概要	病院内で改善した再発予防策
療養	無断離院患者発生時の夜間・休日時の患者確保方法の追加	患者家族が速やかに迎えに行かれない場合、管理師長及び事務管理当直者が協力し、患者確保に努める。
療養	抑制帯が緩み、チューブを自己抜去	抑制帯の結び方がバラバラのため、結び方を図式し、再周知した。
薬剤	抗癌剤以外の注射薬で血管外漏出時の対応	主治医に連絡し指示を受け、カルテに症状・処置を記載する。主治医が対応できない場合は、担当科で対応する。
輸血	輸血だけを単独で行う場合の輸液ライン確保	輸血のみ実施する場合も、緊急時に備え三方活栓を使用し、本ラインに生食100mlルートを確認したのち、側管から輸血を実施する。
療養	介助バー事故防止対策	院内全ての介助バーにすき間を埋めるために、アームスペーサーT字型簡易部品を取り付けた。
ドレーン	気管チューブ挿入時の潤滑剤使用	気管チューブ挿入時の潤滑目的の場合「滅菌ゼリー」を使用する。（キシロカインゼリーやスプレーは局所麻酔不要な場合使用しない。）
他院事例	テープを剥そうとして、誤って子どもの小指をはさみで切る事故	テープ使用時は事前に長さを調整し切ってから患者に使用する。患者に貼付けたテープが取れない場合、はさみで切らない。当院でもモニターのリード線切断事例あり。
食事	高齢者患者の食事に咀嚼しやすく食材形態を変えて提供	食材を球塊状からスライス状にし、咀嚼しやすくすることで、安全性を向上させる。

5. まとめ

- ・当院では医療安全全国共同行動（“いのちをまもるパートナーズ”キャンペーン）に当初より参加し、患者さんと医療者のパートナーシップを築き、医療安全への積極的参加を求めてきました。その一環として患者さん・ご家族への公開講座「みなさまのための患者学」において「医療安全とリスクマネジメント」を開催しました。
- ・日頃から患者さん・ご家族の立場からも情報収集を行っており、その成果として「患者本人」「家族・付き添い」からの発見報告が大幅に増加しました。また他職種間ダブルチェックの励行により発見率が増してきました。これらはチーム医療による部門間の取り組みが、院内での医療安全組織文化の意識向上と捉えています。